
アカミミガメの飼育現状の一例 ～カメを手放すことを思いとどまった夫婦の話～

谷口真理・上野真太郎

654-0049 兵庫県神戸市須磨区若宮町1-3-5 神戸市立須磨海浜水族園

The story of a couple who stopped short of relinquishing the turtle.

By Mari TANIGUCHI and Shintaro UENO

Kobe-SUMA Aquarium, 1-3-5 Wakamiya-cho Suma, Kobe, Hyogo, 654-0049 Japan.

はじめに

須磨海浜水族園は、2010年に淡水ガメ保護研究施設であるきらくえん亀樂園を作った。この施設の1番の目的は駆除した外来種ミシシippアカミミガメを收容することである。この施設のオープンにともない当園には、毎年多くの飼育し切れなくなったカメの相談が寄せられる。このようなカメの引き取りは、通常お断りしているのだが、アカミミガメ駆除キャンペーンの期間のみ、不本意ではあるが、受け入れを許容してきた。このキャンペーンの本来の目的は市民に広くアカミミガメの駆除の参加していただくことで、野外で捕獲したアカミミガメを持ち込むと1匹につき1名様に入園無料券を差し上げている。2010年から毎年実施し、2018年も6月2日から24日まで実施し、飼育し切れなくなったカメも持ち込まれた。その中に、やっぱり持ち込んだカメを返してほしいという、非常に希な問い合わせがあった。その飼育者は、いったいどのような気持ちでカメを手放すことにし、その後どう最期まで飼うことを思い直したのか、その経緯を聞き取った。今回、話を伺ったのは、2018年6月にカメを持ち込んだ関西在住のご夫婦の奥様である。

カメを持ち込んだご夫婦と持ち込まれたカメ

カメを持ち込んだのは、50代に近いご夫婦(ご主人:昭和39年生,奥様:昭和42年生)であった。ご夫婦には息子(平成5年生)と娘(平成8年生)がいるが、今回の出来事において二人の子どもは水族園を訪れてはいない。持ち込まれたアカミミガメは、背甲長19.7cmの雄と21.8cmの雌の2匹であり、飼育期間は約15年に及んでいた。

飼うきっかけとカメの世話(以下聞き取り内容)

カメを飼育し始めたきっかけは当時小学生であった息子が3匹のカメを拾ってきたことから始まりました。その詳しい入手方法は記憶がはっきりしませんが、当時はカメがゲームセンターのクレーンゲームの景品になっていたり、おまつりでかめすくいが盛んに行われていたりしたことから、入手先はそんなところだと思います。入手当時は、3匹とも同じプラスチックケースで飼えるほどの小さなカメでしたが、数年後、その内の1匹は、理由はわかりませんが死んでしまいました。カメの世話は、当時は家族4人でしていましたが、

2人の子どもはそのうち世話には加わらなくなり、現在は夫婦2人(子どもの両親)でしていました。サイズが小さなうちは、プラスチックケースに2匹一緒に飼っていましたが、大きくなり、2匹のカメが喧嘩し始めた頃から、1匹ずつ別の水槽に入れて玄関先において飼っていました。2匹のカメはカメ子とカメ吉と自然と呼ぶようになり、毎日カメのエサを与えて世話をしていました。

手放したい気持ちと手放すきっかけ

カメを飼い始めて10年ほどたった頃、カメも大きくなり、夫婦2人とも年を重ね、年々、水替えが大変になってきたり、また、人からこんな狭い水槽で飼っているのは可愛そう、虐待だと指摘をされたりしました。このような状態の中、須磨海浜水族園に亀楽園ができたことを知り、カメを手放すことを考え始めました。毎年6月に水族園でアカミミガメ駆除キャンペーンが行われるたびに、手放そうかどうか考えては、そのうちキャンペーン時期が終わって、というようなことが数年間続きました。そして、今年、主人の休みがとれた2018年6月4日(日曜日)にカメを水族園に持ち込むことを突然、決意しました。当日、自宅から2時間ほど掛けて水族園に行きました。持ち込みの後、無料の入園券をもらい、亀楽園を実際にみました。すると、インターネットの映像で事前にみた亀楽園のカメの多さより、現在の亀楽園のカメの少なさに驚愕しました。そこでいろいろな想像をしました。ひょっとしたら、たくさんいる亀楽園の中に適応できず死ぬカメもいるのではないのかな？研究材料として殺処分されることもあるのではないだろうか？もしそうだとしたら、私たちが飼っていたカメは、私たちが飼ってあげていたなら天寿を全うさせてあげられたかもしれないのに、私たちがそれを奪ってしまったのではないだろうか？など本当にいろいろな気持ちが巡りました。しかし、そんな気持ちを巡らしながらもその日は帰宅しました。

やっぱり最期まで飼おう

カメは、自宅の玄関先に水槽を置いて飼っていたのですが、翌日いつものように朝出かける際、カメがエサをほしがってカタカタさせる音が聞こえないことに、言いようのないさみしさを感じました。一方でそのような気持ちももっと強くなる前に、水槽も片付けてしまおうとも考えていました。そんな胸に引っかかる気持ちを抱えて、過ごしていたところに、今朝いつものように出勤し職場にいる主人から電話がありました。「やっぱりカメを返してもらいにいこう」という電話でした。私(聞き取り者)は、主人もやっぱり私と同じ気持ちだったのね！！と思いました。そしてすぐに水族園に電話しました。カメを水族園に持ち込んだ翌日のことでした。この日の主人からの電話がなければ、私の中のもやもやした気持ちは、自分の心の中にとどめて、処理しようと考えていたのですが、主人からの電話により、やっぱり返してもらおう、最期まで飼おうと決意したのです。水族園の方にはお手数をお掛けしてしまってすみませんでした。ありがとうございます。

最後に

今回お話を伺った奥様は、持ち込みから3日後に再び2時間掛けて水族園にやってきて2匹のカメを大事そうに連れて帰っていった。連れて帰る際は、目に少しだけ涙を浮かべていたのが印象的であった。これまで水族園では、飼育しきれなくなったカメも引き取ってきた。そのうち、今回のようにやっぱり返してほしいと電話してきて、カメを取り戻した方は3家族いる。3家族ともカメを飼うきっかけは子供であるが、手放す決意や取り戻す決意はその子供は関わっておらず世話をしていた両親、特に母親により決められるようだった。今回も、ご夫婦のお子さんであり、カメを拾ってきた張本人である息子は、現在、実家を離れて暮らしていることもあり、実家を離れた後のカメの世話やこの一連の出来事には深く関わっていないようであった。アカミミガメの飼育の現状やその葛藤が伺える出来事であった。